

神戸だより

台湾交流支援の会 2019.11発行 Vol.24

〈海を渡る蝶「アサギマダラ」〉 武藤 龍雄

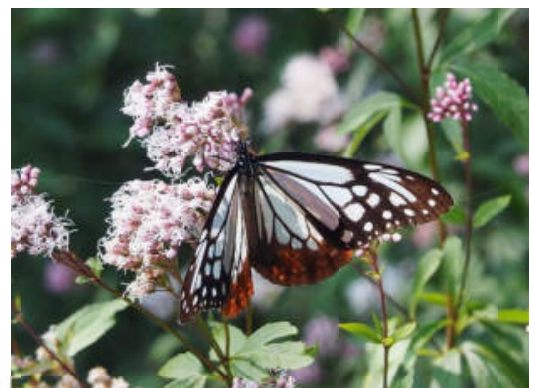
毎年9月末頃から10月末頃にかけて神戸の山間部で、大きくてきれいな蝶「アサギマダラ」を見ることができます。

神戸では六甲高山植物園、摩耶山天上寺、渦が森展望台などに飛来して来ることが知られていますが、それは「アサギマダラ」の好物である「フジバカマ」が植えられているからです。渦が森では地元の人たちが「フジバカマ」を苗から熱心に育て真夏の水やりも欠かさず続けたことで、「アサギマダラ」が必ずやってくるようになりました。



この「アサギマダラ」、秋や冬はどうしているのでしょうか？ 実は、季節によって棲む場所を変えるのです。春から夏にかけては、八ヶ岳のような本州の標高1000メートル以上の涼しい高原地帯で繁殖し、秋になると暖かい南の方へ移動を開始します。遠く九州や沖縄、さらに八重山諸島や台湾にまで海を越えて飛んでいきます。神戸辺りはちょうど一休みの場所なのでしょう。冬の間は暖かい南の島で過ごし、新たに繁殖した世代の蝶が春から初夏にかけて南から北上し、本州などの高原地帯に戻ってくるのです。

この蝶の渡りが分かったのは、今から40年ぐらい前、その生態に疑問を持った沖縄や鹿児島県の研究者の功績です。沖縄や鹿児島県では蝶の姿は春先や秋には見かけるけれども夏場はいなくなり、卵も幼虫もサナギもまったく見当たらないのです。そこで蝶の羽にマーキングして調査することを思い付き、各地の生物学者、研究グループに協力を呼びかけ、何年もかけてやっとその全貌が分かったのです。それにしても、どうやって海を渡るのか、どういうアンテナ、どういう遺伝子が働くのでしょうか？ 本当に不思議な蝶です。



〈台東のコーヒー農園 日本人と台湾人〉 高橋 幹夫

今年8月の産経新聞記事の一部を紹介します

『台東南部・台東県東河郷の山中に日本統治時代に植えられたコーヒーの老木が残されている事が分かり記念碑が建てられた。同地では1931年木村商店(現キーコーヒー)がコーヒー農園を開拓したが戦後放棄されていた。キーコーヒーの社長が2016年に付近の農場視察の際偶然コーヒーの老木を発見し現地の人々が老木の保存に動いた。樹齢90年の老木で非常に珍しい事であった。発見時、周囲は雑木林の様な状態で、通常高さ2メートル程度に枝切りする木は約8メートルまで育っていた。コーヒーの木は一般の農園では20年～30年で植え替える為、樹齢90年の老木は非常に珍しいという。』



(キーコーヒーの柴田裕社長)

発見された老木は木村商店(現キーコーヒー)の創業者柴田文次氏が植えられたとみられ、この老木を3代目社長である孫の柴田裕氏が偶然発見したことになる。キーコーヒーはこのコーヒーの老木を保存、整備して行くことを決定、同時に地元の人々によって、この地で台湾コーヒー文化の原点を作り上げたことに敬意を表し、その功績を次世代に継承していく為、記念碑が建てられました。この1本のコーヒーの樹は「百年珈琲樹」と名付けられた。

台湾では日本統治時代に総督府がコーヒー栽培を奨励し、1930年に住田物産が花蓮郊外に大規模コーヒー農園を経営し1931年には木村商店もコーヒー農園をスタートした。1942年には栽培面積1000ヘクタールを超えた。しかしながら戦争、天災、病害虫によりコーヒー生産は終焉を迎えた。その後1999年の台湾大地震で被害を受けた農地で、付加価値の高い作物としてコーヒー栽培が奨励され、現在では1150ヘクタールまで広がっている。台湾産の豆はフルーティーな香りと爽やかな口当たりで日本にも出荷されている。



(記念碑除幕式
台東県長、饒慶鈴氏)

以上の様な事実を知り、台湾の人々が日本統治時代のコーヒーの老木を大事に保存されているという事に、感謝の気持ちと親台湾の気持ちが益々深まった。